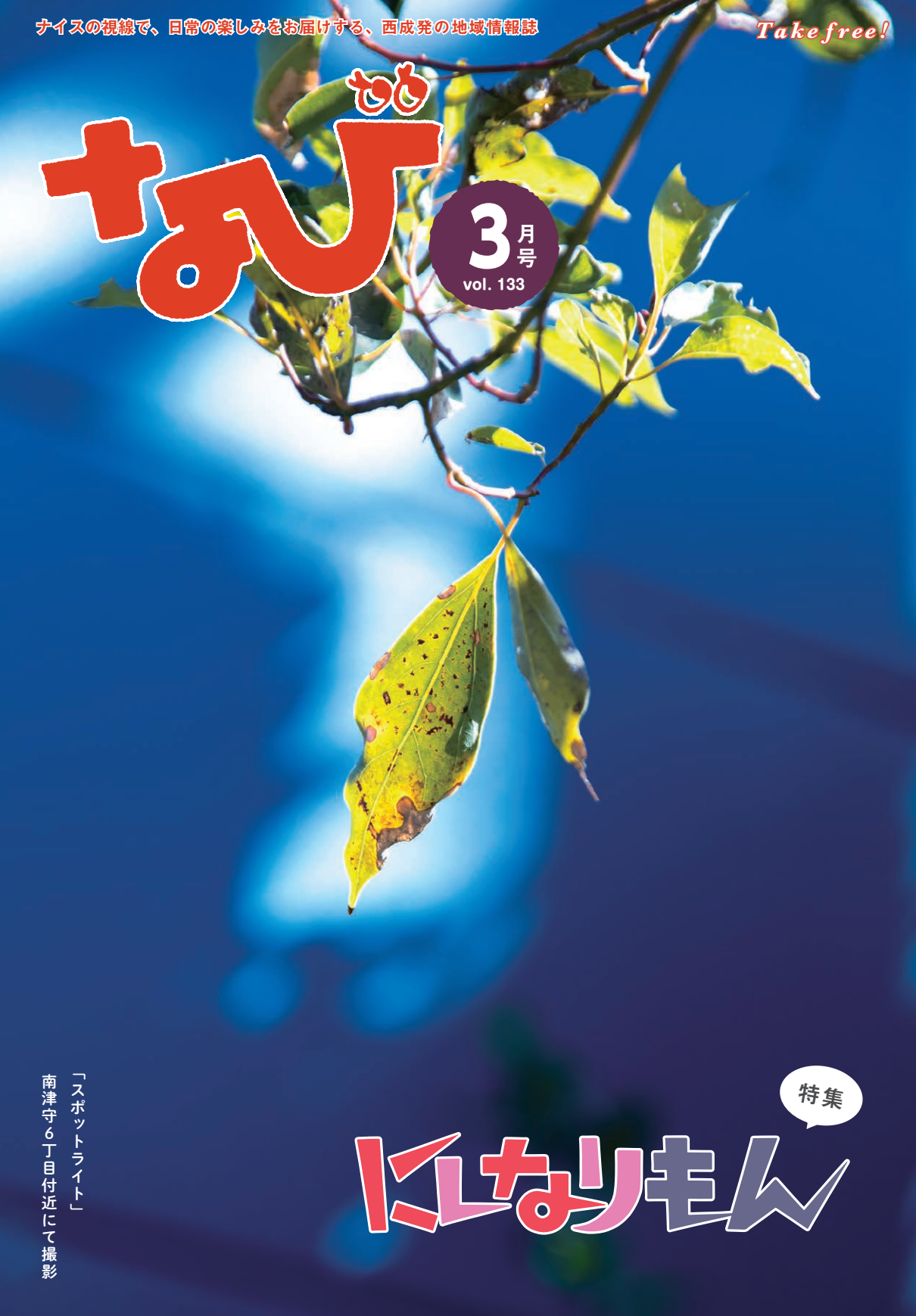
ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌

Take free!

なび

3月号
vol. 133



特集

にしなりもん

「スポットライト」
南津守6丁目付近にて撮影

特集

にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

皮革のまちを求めて②

今回は西成製靴塾（本誌でも何度か取り上げている革靴の手縫い製法を教える塾）の講師である樋口幹さんにお話を伺った。ふだんから塾の運営でコミュニケーションを取っているので、その人となりはある程度知っている。飄々としているのになんだか頼りがいのある雰囲気は何に由来するのか。そのあたりをあらためて探ってみようと思った。

小さな頃からモノを作るのが好きだった樋口さんは、靴というモノは「立体になるのがおもしろかった」という。なるほど、「靴職人」または「靴作家」（この場合、全工程を一人でこなす比較的新しいタイプの職人・作家）になる人は靴が好きでたまらないのだろうと思っていたら、「わたしは靴好きで作っているのとはたぶんちがう」と意外な答えが返ってきた。

「靴は作るものなので、淡々と作り続けることにしか興味がなくって。知らないことがあっても気にならない。できないテクニックは、必要になったときに、身につけようとがんばる。それでいい。上手な人もいっぱいいるし、それはそっちに任せたらいいと思ってやってきてる」。

靴は歪みの集合体

なんだか肩すかしにあったような心持ちで、もう少し具体的に靴（づくり）の魅力について尋ねてみた。

「いやぁ、わからないです（笑）」

――さきほど靴づくりは平面を立体にすることだと言われました。革一枚から形を起こしていくということなら、カバンも立体にしていきますよね？

「似てるんだけど、ちょっとちがうんです」。

――ムムッ、どういうこと？

「パターン（型紙）を起こす作業が靴づくりでいちばん悩むところで、いちばん迷路に入りやすい。そもそも足や木型（足型last）のこと。今はプラスチック製が大半）は曲線ばかりの立体なのに、一旦、無理やり平面に展開していく。で、型紙に沿って切り取った平面の素材を組み立てるときに少しずつずらしていく。縫い合わせるはずのところがこちらの断片のカーブともう一方の断片のカーブがピタッと重なるように設計されてなくて、仮止めをするときに無理やりちょっと力をかけてくっつける、つまり『歪みの集合体』みたいにして立体に戻すんです」。

――ピタッと合わないから、合わせようとするとちょっと平面が浮いてきますね。

「そう、その浮きを縫い合わせて元の立体に戻す。その浮かし具合をどこにどのくらいするのか、というのがパターンの迷路で。ちょっとずつ起き上がってくるんですけど、その起き上がらせ加減を…。だから、正解がどこにあるのかあまりわからなくて、いつも少しだけ不安なまんま、作るんです」。

トランクひとつで伺います

樋口さんは2001年に

革靴の手縫い製法を教える西成製靴塾

講師の樋口幹さん

「trunk」というブランドを立ち上げた。その頃の紹介記事によると、このブランド名には、①ご自身の名前「幹」の同義語と②旅行鞄「トランク」の二重の意味が込められている。それはそのまま営業スタイルに通じている。店舗は持たず、注文があればトランク一つでお客さんのところに伺い、コミュニケーションをとってどんな靴にするかを決める。「靴は友好のツール」という樋口さんの言葉のとおりに。

——お客さんと会って話しても、はっきりと欲しい靴のイメージを持っていないことも多いでしょ？

「ないですね。だから、わたしはそういうのは何も持って行かない。何かを見せると、『これでいいや』となって全然おもしろくないので。使う木型のフォルムを描いたスケッチのコピーだけ持って行く。『trunk』で使っていた木型は先が丸いので、それを横から見てなぞったコピーを持っていって、『どんな靴がいいですか？』って話す。たとえば、わたしは自分で作った靴を履いているし、向こうが持ってきた靴の写真を見て、大枠の絵を描くんですね。そうすると、お客さんも『やっぱり、こうかな？』とかちょっとずつイメージができてくる。そうやってお客さんのオーダーを取るので、一足たりとも同じ靴を作らなくていい。スリルもあるけどおもしろい」。

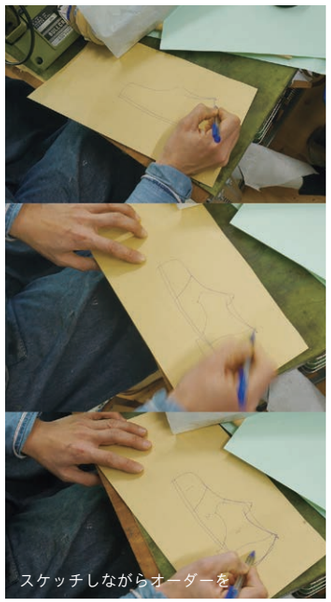
——樋口さんにとって靴づくりのゴールは？

「わたしはオーダーしかやっていないので、その人の好んでいるものを作れれば、そこがゴール。靴が欲しい人がいて『どんなのが欲しいですか』って聞いて、具体的にイメージを挙げていって、今まで売っていなくても『その人が欲しいのはこれ』って。誰がなんと言おうと、その人とのゴールさえ目指せばいいから、その意味では楽ちんなんです。けど、ふつうは基本的に既製靴だから、自分が良いと思ったものをまず出さなアカンでしょ？　あれがわたしにはできないんです」。

——お客さんに見てもらって、購買意欲を高めるみたいなのは向いていない？

「そう。そういうのに向いてない（笑）」

トランクひとつで颯爽と


スケッチしながらオーダーを

妥協をしない目

——いま製靴塾には花田先生という大ベテランの靴職人がおられますが、樋口さんからみて花田先生のすごさってどんなところ？

「靴づくりには工程がいっぱいあるから、うまくいかなかったときに『まぁ、ちょっと…、でもまぁ、いいかぁ』って妥協することがあります。そのしくじりは必ず後でひびいてくる。とくに靴はものすごくシビアに出る。『あっ』と気づいたら、わたしらはどうしようか考えるけど、花田先生は躊躇なく戻る。キレイにやってても『ここがアカンなぁ』って言ったら、たとえその生徒が2時間かかっていたとしても躊躇なく（釘を）抜く。『ここがちょっとこうなってるやろう』とか言いながら、5本ぐらいゴッソって抜かはる（笑）。花田先生のすごさはそういうところに現れてる。

だから、最近はみんな用心して先にわたしに見せに来るから、わたしはおかしいところを指摘した上で、ほどくかどうかは考えさせるようにする。花田先生は言葉の説明がない代わりに釘を抜かはるから、わたしの時点では『ほどかれるかもしれんけど、一回見せてみぃ』と言う。まぁ、だいたいほどかれる（笑）」

——それは製品に対する厳しさってこと？

「すごく曲がって見えるんでしょうね。見えるから気持ち悪いってことやと思う。職人さんには足数をこなすための誤魔化しの術をすごく持っている方もおられて、それはそれでスゴい技術。だけど、花田先生はオーダーで店を構えているから、それをやらないで来たんだと思う。責任は自分で負わなあかんということでやってはるから。やっぱりすごい丁寧ですね」。

牛のようにやりつづけねばならぬ

ベテラン靴職人の花田先生

最後に、ご自身の今後についても尋ねてみた。

「最近の目標は70歳ぐらいになったら靴が米と換えられるぐらいに（笑）。靴と米を換えて、その米で野菜と換えて…」。

——物々交換？

「そう。岡潔という数学者が好きで、その人の本を読んでいたら、夏目漱石が死ぬときに芥川龍之介に宛てた手紙のことが出てきた。その手紙で『とにかく人は牛のようにやりつづけねばならぬ』（※）って書いていたらしい。わたしもそうありたいな。何がどう牛のようにかわからんけど…。草をずっと食べるってこと？（笑）どういうことか、まだよくわからんけど『牛のようにかぁ』と思って。

わたしらの時代は食えてないと『趣味やろ！』ってすごい言われた。だから躍起になって『食ってやる！』ってがんばったけど、なんかそうやなくていいやと思って。この仕事は辞めへんのやから、わたし。だから、淡々と牛のようにやり続けて、最後、米に換えられるぐらいになったらいいな（笑）」

trunk の靴（左：レディス、右：メンズ）

※夏目漱石は亡くなる4、5ヵ月前に芥川龍之介と久米正雄に宛てた手紙を2通したためている。大正5年8月21日付の手紙には「ただ牛のように図々しく進んで行くのが大事です。」とあり、また同年同月24日付の手紙には「牛になる事はどうしても必要です。吾々はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。」とある。

文責：若松司

地域こども

応援団（おうえんだん）

第10回

子育てに取り組む人・団体・施設を紹介して、子どもを支えるネットワークをどんどん広げていきます！

商品びっしりの佐藤金物店にて

朝の見守り活動

「ハイタッチ！」というよりも、ミドルタッチ

毎朝、元気にハイタ～ッチ！ 松之宮小学校見守り活動

今回は、松之宮小学校の先生から噂で聞いた地域のおっちゃんを紹介したいと思います。その人は近くの鶴見橋商店街の6番街で金物屋を営む佐藤成蔵さん（67歳）。雨が降っても、手がかじかむ冬の日も毎朝校門に立ち、子ども達の登校を見守っておられます。私の職場と同じ商店街にある、近所の「佐藤金物店」に伺い、お話を聞いてきました。

きっかけは朝の散歩

佐藤さんは若い頃から体を動かすことが好きで、40歳代の頃から健康維持のために毎朝散歩することが日課になっています。松之宮小学校の前がいつもの散歩コースで、登校時間帯に校長先生が毎朝校門で子ども達に声かけをしていたそうです。当時、佐藤さん自身の子ども2人もこの小学校に通っていたので、自然と校長先生と立ち話をするようになりました。校門で立ち話をしていると、子ども達が登校してくるので自然と声をかけ、挨拶が当たり前になりました。そして、いつの間にか毎朝校門に立って声かけすることも日課に加わったそうです。以来、19年に亘って登校日の見守り活動が続いています。春先に新しい先生が赴任してくると、朝の声かけ、ハイタッチを伝授し続けています。

子ども達との関係

校門で子ども達と接するので学校の先生と勘違いしている子もいるようで、「先生！」と話しかけられたり、商店街で店番をしていると子ども達から不思議な視線を送られることがあります。入学したての小さな頃から、佐藤さんよりも大きく育った六年生まで、毎朝声かけして全員とハイタッチします。子ども達も顔見知りなので、街ですれ違うときに元気に挨拶したり、恥ずかしそうに下を向く子もいたり、「いろんな子がいるよ！」と楽しそうに話されていました。また、見守り活動を何年も継続されていることが地域の保護司に伝わり、佐藤さん自身も10年ほど前から保護司を務められています。

佐藤金物店

「子どもの応援団」という趣旨からは逸れますが、佐藤さんのお店を訪問した感想です。来客で話が中断したときに、店内を見回すとホームセンターで見かけるような様々な商品がビッシリと並んでいます。商店街で店舗を始めて約50年、合い鍵だけでも昔は一日に20本以上売れていたそうです。今は商店街の人通りも少なくなっていますが、話を伺っている30分ほどの間に何人ものお客さんがあり、地域密着で商売されていると思いました。

私が子どもの頃に住んでいた田舎町にもよく似た雰囲気の金物店があり、家のお使いで買い物に訪れると、必ず「何するん？？」（※広島出身なので広島弁）と質問されるのを思い出してニヤけました。

レポート：沖田一志

[田岡秀朋] 先月、祖母の紀寿（百寿）のお祝いに家族で参加した。僕の次男は0歳で世紀の年齢差は感慨深かった。いろいろあるけど、長生きはいいもんだ。

[佐々木敏明] 石牟礼道子さん、金子兜太さん、さようなら。
不知火の天に撒きたる怨の豆
またひとり逝く人を聴く冬の旅

[沖田一志] ラジオを聞いてたら財布の話題。その番組の出演者２人は数年ごとに買い換えるって言ってました。私が毎日持ち歩いている財布は17年目、まだまだ現役です。皆さんはどうですか？

[飯島照喜] 東大阪の住宅管理の業務についてはや1年、何とかいい初年度のフィニッシュをと思っているが、何が起こるかわからない現場。まだまだドタバタが続くのか、いやそれを楽しむぐらいの余裕を、と自分に言い聞かせていた。

おもろいひとびと

地域にねむるヒト資源。その気で探すといるいるオモロイ人が。『なび』はオモロイ獲物をさがして今日も行く。隔月でお送りします！

わがまちの美術な居場所 山口 幹夫さん
（「彩いろ陶芸教室」主宰）

５年前、週１回開催の「楽塾」で陶芸の実習を企画した。それが「市交流センター」内で陶芸教室を開く山口幹夫さん（71）とのはじめだった。自然体で、親切丁寧な指導が塾生たちの人気で、その後、年１度（3～4日間の制作日）は楽塾授業の中に陶芸教室が入る。

山口さんは若いころ油彩の画家を志した。しかし若くして妻が逝去。その衝撃で数年間心を閉じて何もできず、その欠落感を陶芸教室に求めた。それが現在の陶芸家となる動機になる。陶芸を学び、10年前に自ら主宰する教室を立ち上げ60才から船出する。

初心者たちには寄りそって指導する。そのやり方を批判する人もいるが自分流を続けている。楽塾実習中、山口さんが補正したものを自分流に“補正”し直す人もいて、山口さんはそれが面白いと話す。

17年12月、大阪市立美術館で開催された「日本美術工芸会展」での公募で、山口さんは新人賞を獲得。70才の新人賞だった！「まだやる仕事のイメージが次々に頭に浮かぶ。次々作っていきたいが製作時間が足らん。色々な陶芸分野に挑戦したいが近頃はちょっときつい。齢のせいかね」。言いながらも徹夜は日常茶飯事で、先日も朝までの作業だ。しかし「老けてられん」と笑っている。「制作時、着色する際の釉薬（ゆうやく）は、オリジナルな色出しに専念して努力してはる」とはパートナーである吉本さんで、山口さんの陶芸活動を支えてきた協力者だ。

その後、吉本さんと共に現在地に工房兼教室を開いた。「彩いろ陶芸教室」と命名し生徒さんたちも通う。16㎡ほどの工房は狭い。２階は居室で工房は１階にある。部屋の奥に焼成用のカマが設置され、作業用机が２脚（１脚４人）。８人で満室だ。生徒は現在10人ほど。自由に作業ができる。生徒にとって落ち着いた居場所の雰囲気だ。３人の生徒さんたちが陶器づくりに専念していた。

「どこの陶芸教室に行っても絵付けがない。うちの特色は絵付けができる。色々な色で着色してもらえる。屋号が＜彩いろ陶芸教室＞だしね。今後も展覧会には積極的に出展し、作品をアピールしたい。自分の型を作るのがプロ。陶器を志す人たちは様々な場所で修行し、自分の型を編み出してほしい。これがないと自らの個性を活かせない。また多くの人の応援と協力が、自分のチャンスを活かす。人との関わりが最大の感謝」とも話す。

山口さん自身工房を最大の居場所とし、さらに近隣の人たちの居場所にもした。

レポート：佐々木敏明

山口さん（右）と協力者の吉本さん

＊山口作品は、阿倍野区帝塚山の「蔵」ギャラリー・CLASSIC（06-6671-6749）で常設展示されている

今月のお隣さん

孤立をおそれず、紙面でつなげる地域の輪

奥井 國美（おくい くにみ）さん

今月のおとなりさんは、奥井國美さん。西成生まれの西成育ち。ゆ～とあいの会員で、卓球サークルで汗を流す毎日。春から秋にかけては毎日でも海に行きたいほど、釣りが大好き。若い頃にはモトクロスに夢中で、オートレースの大会で２回も優勝したほどの腕前。ほかにも野球のリトルリーグやシニアリーグのコーチも務めたことがあるなど、とても趣味が多彩ですね。いつも笑顔で誰とでも気さくに話ができて、涙もろくて、情によわくて、世話焼きで、意外と短気な性格の奥井さん。今回は「真っすぐで他人にやさしい」おとなりさんのご紹介でした。

たくやの ろくじょうふたま 畳間

ハナレバナレになった人とまち。
くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

つよく

何気なく暮らす住まいや建物のことって、意外と知らない。

建物は、オシャレや機能性も大事だけど、地震の多い日本では、揺れや火災から中の人を守るという使命を持っている。

〝つよく〟と一口に言っても、揺れに対しては「硬く（耐震）・いなす（制震）・回避（免震）」と３つの考え方がある。揺れに対して建材や構造を硬くして耐えるのと、コップの水のように建物の一部が地面の揺れとは逆方向に揺れて抑えるのと、建物や大事な部屋と地面の縁を切って揺れの影響を最小限にするのと。一長一短あって、状況に合わせて計画される。

お寺の五重塔などの日本の伝統的な木造建築には、すでに制震や免震の考え方が備わっている。身近なものでは、木造家屋の瓦も重さで倒壊しないように、揺れれば落ちる造りになっている。自然との共生という意味では日本に木造の家は理にかなっているよう。

「適材適所」。この語源は、伝統的な家屋や寺社など建築現場での木材の使い分けにあるそうだ。つよくある方法も決して一つじゃないはず。

（安田拓也）

とある五重塔

［安田拓也］映画『羊の木』主役は６人の元凶悪犯の更生を一挙に引き受ける町の市役所職員で、事実を知る数少ない一人。皆が幸せになれる訳ではない様が衝撃的に描かれていた。

［西田吉志］ゆ～とあいで２月から開催している「楽トーク」がメッチャおもろいよ！第１回は映画監督から聞く製作工程から業界裏話！３月も開催しているのでゆ～とあいHPで、ぜひ検索してみてください。

［寺島史視］先日、太鼓の公演で愛媛県へ行ってきました。当日は多くのお客さんに来場いただき、人権講話や体験教室、「怒」の演奏を行いました。今後も心に残る演奏を目指していきます。

［谷口円］３月が誕生日なのですが、私と母は誕生日が全く同じです。例年なかなか誕生日らしいことができないので、今年こそは自分と母に美味しいものか旅行かなにか、プレゼントしたいところ。

号外 マナビバ！通信

「まずは、おいでよ。」ゆ～とあいには中学を卒業してから進路を一緒に考える場所と時間があります。そんな“フリースペース マナビバ！”の徒然な日常をお伝えします。

マナビバは毎週火・木曜日の１０：００～１６：００、ゆ～とあい２階でオープンしています。
電話：06-6561-8801　Mail：info2@human-ref.jp

バレンタインチョコ

「日本は、義理チョコをやめよう」海外の有名チョコメーカーの広告が話題になっている。

国内外を問わず、バレンタインデーの時期にチョコレートの売り上げは急増する。菓子メーカーにとって死活問題である。2月14日に女性から男性に親愛の情をこめてチョコレートを渡すという風習が日本で始まったのは、筆者の小学生の頃と記憶している。初めてもらった時のドキドキ感は、懐かしい記憶として今でも残っている。学生時代は、何個もらったかを友達どうしで自慢し合ったものだ。

働くようになって、いわゆる「義理チョコ」が猛威をふるうようになる。たくさんいただくのは嬉しいのだが、その後の「ホワイトデー」でのお返しが大きな負担になってくる。負担になるような義理チョコ、義理ホワイトをやめるのは大いに賛成だが、一方でさみしい気もする。お中元・お歳暮などの風習が、人と人との円滑な関係を促進してきたことも否めない。

マナビバでは過去2年とも2月のイベントは、バレンタインチョコづくりを実施してきた。彼氏彼女に対してだけでなく、「親や兄弟や同性の友人へチョコを贈ろう」というコンセプトで取り組んできた。人と人とのつながりに役に立つことは、たとえ「義理チョコ」と呼ばれようとも続けていきたい。

文責：阪井　茂

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

今、厚生労働省が提案している「地域共生社会づくり」について。理念はよくわかるが、地域に暮らす一市民としては何をどのように考え行動すべきなのか、疑問に思うことがたくさんある。地域の困りごとは地元の人間が一番わかっていると思われがちだが、気付かないことも多いし、具体的な解決策を考えられる人ばかりでもない。多様な人びとが暮らす地域に丸投げされても困ってしまう。行政からの「強制」にならないように、本当の意味での官民共同の「共生」を実現しなければならない。

その意味で隣保館の果たす役割は非常に大きいと思う。人権を軸にすべての地域住民の間に入って、居場所の提供、支援、様々な活動への参加、生きがいづくり、相談、経済的な問題も含めて地域の人が幸せになるよう自立に向けて支援する。行政と地域住民を仲介・調整しながら事業を進める、非常に大事な機関だと思っている。

（寺本良弘）

いい湯かげん

職人がうんと身近になった靴学校

「靴職人養成講座（シューカレッジおおさか）」が始まったが、これは楽しみだ。「西成製靴塾」が一年間で有料なのに対し、この講座は3ヶ月で無料だ。「皮産連」という業界団体を通じた公費が導入されているからだが、その背景には、例のTPP（環太平洋パートナーシップ協定）による経済の自由化から国内産業を防御する目的がある。

訓練期間は3ヶ月だが、講座を主催する大阪靴メーカー協同組合の加盟企業に就職し、働きながら訓練を継続していくことがこの講座の目論見だ。即戦力を求める時代なのに、業界もよく踏み込んだものだ。「靴職人」という高そうなハードルをうんと低く見せることができているのは、講座の事務局を担う´Aワーク創造館の知恵なんだろう。「就労支援」という文言を使わない気配りも透けて見える。

その昔、阪神大震災の復興支援に「仮設工場」というものがあったことを覚えておられる読者は多いと思う。神戸のケミカルシューズも工場の中にあった。「仮設」なんて、震災という非常事態だから容認できても、職人にとってプライドが傷つくネーミングだったかもしれないが、これが功を奏した。仮設工場は、被災企業の「避難所」であり、「操業再開準備所」でもあったし、被災市民の「生活再建のイメトレの場」にもなった。幾重もの思いが重なっていた。後に、そこから企業組合や協同組合が生まれ、官民連携型産業振興公益法人も生まれた。余計な口を出さない行政の「絶妙の立ち位置」も光っていた。そして、神戸のケミカルシューズは今も健在だ。

「仮設工場」、単純な発想に見えて、何とも意味深なシナリオだが、難しく言えば、「中間労働市場」と定義できると、ボクは、加藤恵正兵庫県立大学教授から聞いた。「中間」あるいは「媒介」って、被災（失業）から復興（雇用）への「上り框（かまち）」という意味だと理解することは、「中間的就労」が制度化までされた現在では、容易なことだろう。しかし、就労支援をはじめからインプットした労働市場に変身していく、それが中間労働市場であり、これからの成長産業だという理解はまだまだ広まっていない。ボクは、昔からそこをイメージし、製靴などの仕事を「都市生活関連産業」なんてネーミングしたり、はたまた、ビルメンテナンス業界が「新雇用産業」なんて呼称した時には、膝を叩いたりもした。

西成製靴塾の関係者は「靴ほど引き出しの多い業種も少ない」と語っておられたが、職人が育つ製靴産業は、それだけ豊富な支援メニューを内包しているものなのに、案外と当人が気づいていなかったのかもしれない。それが発掘されていくのは、受講生もさることながら、事業者にも、「靴のまち」の住民にも喜ばれることだろう。

㈱ナイス代表取締役
冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

［若松司］西成製靴塾の者として地元の靴メーカーの経営者さんと話をする機会が増えている。4月開校の「シューカレッジおおさか」をはじめとする取り組みがおもしろくなりそうな予感。

［山村裕太］中学生の頃、歯医者にいったときに、「噛みあわせが悪いので、頬杖をついて顎を押さえるだけでも効果ありですよ」と言われ実践していました。見事にしゃくれました。

地域の縁を心でつなぐ

松向寺さんの心の時間

ある小学校教員のすてきな言葉に出会いました。「あなたたちには、脱いだ履物をそろえる自由があります。」これを聞いた生徒はどのような行動をするのでしょう？ 仏教における「自由」の意味を考えてみましょう。お釈迦様は、晩年「自らを頼りに修行せよ。真実を頼りに修行せよ。（自灯明、法灯明）」と説かれました。すなわち「自由」とは、真実の教えを学び、自分が正しいと選んだ道を歩むことといえます。教員は生徒自らの判断で正しい道を選ぶことを願ったのです。

このことは大人にもあてはまります。「タバコのポイ捨てを見つけると、出来るだけゴミ箱に捨てるようにしています。」という知人がいます。大阪には「小さなことからコツコツと」という有名な言葉もあります。履物をそろえることやタバコをゴミ箱に捨てることは小さなことですが、その一つ一つの正しい行為の積み重ねがその人の人格を高めます。同時に自分の時間を他人や社会の為に費やすことで、社会も高まっていくのです。

松向寺　通法

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感じたことをつぶやいて、西成のまちづくりに役立てていきます！

なび編集長 寺嶋公典

「楽トーク」第２弾のテーマと講師が見つかった？

学習会の冒頭に講師が、これまでどんな人生を歩んでいたのかを話すことがよくある。ある人は教師になる前に、青年海外協力隊としてエジプトで過ごしていたそうで、またある人は、生まれも育ちもずっと福島区。そんな話を聞くと、エジプトや福島区に関することは何でも知ってるのでは？と思うようになった。

『なび』の先月号（vol. 132）で宜喜さんが福山雅治のファンだと知った。宜喜さんの勤務中、喫茶店で福山雅治の曲が流れるとニンマリしてしまった。英語がペラペラだったり、難しい資格を持っているということも大事だが、その人がどんなことに興味があり、知識を蓄えているのかを知ることも大事だと感じた。趣味や関心ごとがわかると、そのことを切り口に話が弾み、距離感がとても近くなる。まだ伝えていないが、自分の好きなことについて好きに話してもらう「楽トーク」という企画で「福山雅治」や「エジプト」をテーマにやってみようと企んでいる。

ゆ～とあい

smile

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ～とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび３月号（vol.133）
発行日：2018年３月１日（創刊日：2007年１月１日）
発行：株式会社ナイス
発行人：代表取締役 冨田一幸
住所：大阪市西成区長橋 3-6-33
電話：06-6563-1156
E-mail:info@nice.ne.jp
url:http://www.nice.ne.jp/

編集長：寺嶋公典
編集：飯島照喜、沖田一志、佐々木敏明、田岡秀朋、寺島史視、西田吉志、安田拓也、山村裕太、若松司（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki　デザイン：谷口円

facebook
facebook：https://www.facebook.com/navi.nishinari/